

2018年(平成30年)1月19日(金曜日)

29 地域 A島根

高校スポーツの未来 議論

松江で全国高体連研究大会



研究大会は「『スポーツが結ぶ縁』～高校生アスリート、世界へそして未来へ～」をテーマに開催。開会式では、全国高体連の岡田正治会長が「情報交換を通して、課題解決に向けた大きな一歩となることを期待する」とあいさつした。シンポジウムでは、パネリストの早稲田大スポーツ科学学術院の中沢篤史准教授が日本と海外の部活動の違いについて発表した。「日本の部活動の目的は人間形成だが、アメリカは競技力の向上が目的となっている」と指摘。「日本の部活動は加入率も高く、活発で世界的には特異なほど大規模化している。行き過ぎた指導が起こることもあり、今後のあり方の議論が必要」と訴えた。

日本の部活動の現状について話す中沢准教授

全国の高校のスポーツ指導者らが研究成果を発表する「第52回全国高校体育連盟研究大会」(読売新聞社共催)が18日、松江市殿町の県民会館で始まった。各都道府県の高体連関係者や指導者ら約500人が参加し、19日まで開かれる。(土谷武嗣)

部活や健康・安全活発に 石見神楽披露も

成果を発表した。

県内からは瀬摩高(大田市)の山口陽子教諭(卓球部顧問)が「部活動における心の健康と安全」と題して、2016年度、県内の高校で運動部に所属する3年生に行ったアンケート結果を紹介した。部活動を辞めたいと思う要因の一つに、指導者との関係が大きい。

く影響しているとして「指導者は生徒との関わり方に留意し、何をすべきか考えてほしい」と話した。

アトラクションでは、浜田商高の郷土芸能部が石見神楽の演目「大蛇」を披露。参加者は熱のこもった演技に拍手を送っていた。



浜田商の生徒による石見神楽の公演(いずれも松江市で)

2018年(平成30年)1月20日(土曜日)

◆ 高体連研究大会 松江で開催

全国の高校スポーツ指導者らが研究成果を発表する第52回全国高校体育連盟研究大会(読売新聞社共催)が18、19日、松江市の島根県民会館で開かれた。

19日は、陸上男子100mで日本人初の9秒台を記録した桐生祥秀(よしひで)選手を指導してきた東洋大の土江寛裕コーチが講演。約500人の参加者を前に、桐生選手との4年間を振り返り「指導者が提案したメニューを選手が受動的に行うのではなく、選手が主体的に考えて練習を行うべき。指導者は選手に寄り添いサポートすべきだ」などと話した。

研究大会の優秀研究には、山口県立大津緑洋高の岩本圭史教諭、島根県立瀬摩(にま)高の山口陽子教諭、香川県立坂出工高の林晋平教諭の3人が選ばれ、それぞれ副賞として読売新聞社賞が贈られた。

29 地域

松江市の島根県民会館で18、19日に開かれた「第52回全国高校体育連盟研究大会」(読売新聞社共催)で表彰された優秀研究に、県立坂出工業高の林晋平教諭が選ばれた。

林教諭は「男子新体操競技の普及と発展について」のテーマで発表。ジュニアクラブを再建して小中学生を強化したり、地元交響楽団の生演奏に合わせた演技会を開いたりして、男子

新体操の普及と技術向上を目指す取り組みを紹介した。研究内容は「認知度の低い男子新体操の実態を踏まえた取り組みで、今後の発展性もある」として評価された。表彰式後、林教諭は「表彰を励みにさらに普及に努めたい」と語った。ほ



優秀研究に選ばれた林教諭(松江市中)

林教諭(坂出工高) 優秀研究

高体連大会 男子新体操の普及と考察

かに山口県立大津緑洋高の岩本圭史教諭と、島根県立瀬摩高の山口陽子教諭も選ばれた。

閉会式では、全国高体連の岡田正治会長が「発表では、聞くこと、見ることをすべて目からうろこが落ちるようだった」と述べた。

研究大会は、全国の高校のスポーツ指導者らが研究成果を発表し、高校体育・スポーツの振興と発展を図るのがねらい。今回は全国から約500人が参加し、指導者12人が研究発表をした。来年は1月17、18日、甲府市で開かれる。

2018年(平成30年)1月20日(土曜日)

29 地域

優秀研究に山口教諭(邇摩高)

全国高体連研究大会

「部活と心の健康」着目評価



優秀研究に選ばれた山口教諭(右)ら(松江市で)

松江市の県民会館で開かれていた「第52回全国高
校体育連盟研究大会」(読売新聞社共催)は19日、
2日間の日程を終えて閉幕した。発表者12人のうち、
県立邇摩高の山口陽子教諭ら3人が優秀研究に選ば
れ、閉会式で表彰されたほか、男子100位の日本
記録を持つ桐生祥秀選手を指導する東洋大の土江寛
裕コーチ(出雲市出身)が講演した。(土谷武嗣)

山口教諭は「部活動にお
ける心の健康と安全」のテ
ーマで発表。2016年度、
県内の高校の運動部員や元
部員の3年生約3300人
に行ったアンケートの回答
を分析し、「生徒が部活動
を辞めたいなどと訴える原
因は部活動での出来事にと
どまらず、日常生活全てに
関わっている」と紹介。「指
導者はあらゆる方向にアン

テナを広げ、生徒の状況や
変化を把握する必要がある
」と訴えた。

また、指導方法や指導者
への不満から部活動が嫌い
になる生徒がいるとして、
「指導者側が何をすべきか
を改めて認識しなければな
らない」と話した。

発表内容は、「部活動を
辞めたい理由を浮き彫りに
し、支援の方法を探り、心
の健康という新しい分野に
切り込んだ」と評価された。

山口教諭は閉会式後、高
校生の協力がなければでき
ない研究だった。感謝の気
持ちでいっぱい話した。
保健体育の授業中、元気の
ない生徒の心の変化や悩み
が見えるようにしたいと思
ったのが研究のきっかけだ
った。「今後は、生徒や指
導者にデータ結果を提供し
ていきたい」と話す。

優秀研究には他に山口県
立大津緑洋高の岩本圭史教
諭と、香川県立坂出工高の

林晋平教諭も選ばれた。

閉会式では、全国高体連
の岡田正治会長が「発表で
は、聞くこと、見ることす
べて目からうろこが落ちる
ようだった」と述べた。

閉会式に先立ち、東洋大
の土江コーチが「スプリン
トで世界と戦う」をテーマ
に講演。陸上競技部で「俺
の考えるトレーニングをや
ろう」と練習メニューを組
んだが、桐生選手は肉離れ
を起こして日本選手権に出
場できず、選手の自主性を
重んじる指導法に変更した
ことを明かした。

昨年の世界選手権ロンド
ン大会で日本の男子400
メートルが銅メダルを獲得
したのは「バトンパスのう
まさや選手個人のスピード
だけではない。選手間の信
頼が一番大きい」と述べ、
東京五輪で「目指すところ
はセンターポールしかない
」と意気込んだ。講演後、
県内のアスリートに向けて
「今は色々な情報を手に入
れることができる。島根県
だから世界と遠いと思わな
いほしい」と話した。

2018年(平成30年)1月20日(土曜日)

29 △ 地 域 12 版



優秀研究に選ばれた
岩本教諭(松江市で)

ラグビー指導 岩本教諭の研究表彰

松江市で18、19日に開かれた「第52回全国高校体育連盟研究大会」(読売新聞社共催)で表彰された優秀

研究に、県立大津緑洋高(長門市)の岩本圭史教諭が選ばれた。

ラグビー部を指導する岩

本教諭は「競技力向上システムの構築」と題して発表。強豪校だった大津高が他校と統合して現在の大津緑洋高になってからも、OBや住民らの指導支援により競技力を高める体制が継承さ

れていることや、部員に礼儀指導などを徹底した成果を紹介した。

発表内容は「地方都市に今後起こる課題で、生徒への取り組みも参考になる」として評価された。表彰式後、岩本教諭は「地域や行政の方々に支えられたおかげ」と喜んだ。

大会は、全国の高校のスポーツ指導者らが研究成果を発表し、高校体育・スポーツの振興と発展を図るのが狙い。今回は全国から約500人が参加し、指導者12人が研究発表をした。